―研究資料―

ロシア帝国軍医・関餘作のロシア通信(二)

大西久男

目次

一、はじめに
二、ルーマニアからのロシア通信(二)
三、イルクーツクからのロシア通信
四、「一番川施療所」に勤務
五、大阪商船の船医に転身
六、おわりに――勤務医から開業医への生涯――
※参考文献

一、はじめに

筆者は前号（本学紀要・第二十五号）において、日本人医師関餘作（関寛斎の三男）が第一次世界大戦（一九一四～一九一八）の時、帝政ロシアの軍医として戦線の野戦病院において、ロシア陸軍の傷病者の治療に活躍し、その傍ら日本の友人や恩師に書き送った書簡について記述した。

その書簡を通して、当時のロシアやルーマニアの実情をうかがい知ることが出来た。

彼の勤務地は前回述べたように、スモレンスクの陸軍病院を皮切りに、ペトログラード（現在はサンクトペテルブルク）、そして戦場に近いドウインスクの「四一四号野戦移動病院」に勤務することになる。

前回の内容と重複するが、この原稿を書くにあたって事柄の推移を復習する意図で、極く大ざっぱに繰り返すことをお許し願いたい。

この野戦病院には軍医が四名、看護婦が六名で、負傷者の手当にあたっていたようで、日本も日本赤十字が医師と看護婦を派遣したが、彼等は戦線ではなく後方勤務ともいえる場所で、ペトログラードが勤務場所のようであった。これについては、関も手紙に書いているが、日本赤十字の濫費に腹を立てている。

個人として負傷者の治療にあたったのは、日本人として関餘作ただ一人であったと思われる。

しかも生死の保障がない野戦病院の勤務となれば、自ら応募してロシアの軍医になったとはいえ、その心中を察し兼ねる気もするのである。

利潤を第一に考える商社員ならいざ知らず、彼にはそれは当てはまらない。
事実日本の企業は、この大戦中にもロシアへ足を伸ばし、ペトログラードには日本を代表する財界の社員が滞在していることを、手紙に書いている。
それ故、関餘作の存在は滞在している日本の商社員の目からは、異常に映ったかも知れない。命知らずの医者ぐらいに思ったかも知れない。
横道にそれて恐縮だが、この第一次世界大戦中、モスクワに乗りこんでアスピリンを売ったという勇敢な社員のエピソードが、『武田百八十年史』に記載されていることを知ったが、この話は福井県立大学の泉彪之助先生からのご教示によるもので、泉先生は魯迅の作品『藤野先生』のモデル、藤野巌九郎の調査研究に長年とりくまれ、多くの業績を挙げられている。また先生の研究によると、ロシアの十月革命後、アメリカ海軍軍医としてウラジオストクに駐在した、アメリカ人医師トーマス・B・ダンという医師が、魯迅を診察したという。
ロシア革命後、関餘作は戦線から逃れ、ウラジオストクで短期間ではあるが、医師として勤務したから、ひょっとしたらトーマス・B・ダンとウラジオでの接触が可能であったかも知れない。しかしこれは想像である。
話を元に戻すことにする。
ドウインスクの野戦病院から、ウクライナの首都キエフに行き、この地に数日間滞在してから、ウエルバという地図にも載っていない場所に設営されている野戦病院に勤務するため出立する。
ウエルバという地名を、筆者はいろいろ地図で探してみたが、ついに発見することが出来なかった。どなたかご教

示下されば有難い。

関餘作の文面から考えると、当時のロシアとオーストリアの国境近くらしい。

関にとってウエルバでの勤務は、相当に辛いものだったようで、またスモレンスクに転勤したいと願いを出したが、それは果せずルーマニアの「ヤーシ」に転勤の命令が届く結果になった。

ルーマニアの「ヤーシ」からの手紙（前号ロシア通信16）に書かれているように、当時のルーマニアという国は、政治的にも経済的にもかなり困窮していたようである。

ルーマニアといえば、最近ルーマニア革命と言われる事件のあったことは、まだ記憶に残っていることだろう。チャウシェスク大統領の独裁政治と反対派の衝突、反政府デモ。

大統領夫妻は救国戦線側に逮捕され、特別軍事法廷で死刑の判決を下され、同日中に処刑された。チャウシェスク処刑のニュースは内外に大きな衝撃を与えた。この事件はついこの間の出来ごとのような気がするが、一九八九年十二月のことである。

関餘作がルーマニアのヤーシという地に転勤した当時も、「……物価ハロシアヨリ安キ様ナレトモ洗濯石鹸ハナク、シャツハ破レル迄着テ棄テサル可カラズ。……欧州ニモ此ノ如キ国アルヲ怪シム……」という状況である。

ヤーシの野戦病院では、負傷者の包帯の巻き換えなどをしたあと、オデッサに送った。

しかし、ヤーシの野戦病院での治療のしかたは、かなり適当に処置されたようで、関も手紙に記している。

ヤーシの野戦病院には、軍医が十五人、看護婦が数十人勤務していたという。

また手紙によれば、ロシアの新聞にはドイツがしきりに講和したいと思っているように書かれているが、ほんとうはロシアの方が講和を望んでいるのではないかと記している。

こうしてみると、両方ともかなり疲労の状況にあると思われる。ロシアの兵隊たちは皆平和を強く望んでいると書いている。

戦争の長期化にともなって、ロシア国内の市民生活は困窮し、政情の不安が高まり、遂にロシア革命へと発展し、ロシア帝国のロマノフ朝は崩壊の結末をたどることになる。

ロマノフ朝崩壊後、一時期ロシアには臨時政府と労働者・兵士の二重政権が生まれた。

臨時政府は戦争継続の覚書を発し、帝国主義諸国との協力を約束した。しかし、一九一七年四月、亡命先のスイスから帰国したボリシェヴィキの指導者レーニンは、いわゆる四月テーゼを発表、戦争の中止、ソヴィエト権力の樹立等のスローガンをかかげたのである。

この呼びかけは人民の圧倒的な支持を獲得した。一方臨時政府側は人民の不満をそらすため戦線で進撃をこころみたが、思うようにはいかなかった。

そのご、国内では労働者・兵士の反抗が激しくなり、自然発生的なデモが起り、軍隊の弾圧がはじまり、レーニンは一時フィンランドに逃れた。

だが、間もなくレーニンが帰国し、武装蜂起を起こす。一九一七年十一月二十六日、このため臨時政府は降伏した。いわゆる十月革命である。

ここに、世界で最初の社会主義政権が誕生したのである。

一九一八年三月、ソビエト政府はドイツと単独講和をした。しかし、ドイツ側も次第に補給難におちいり、一七年四月のアメリカ参戦後は、英仏側との力の差は決定的なものとなった。一八年十一月、ドイツでも革命が起り、その結果ドイツは降伏し、第一次大戦は終る。翌年戦後処理のための会議がパリのヴェルサイユ宮殿で開かれ、ヴェルサイユ講和条約が調印されるのである。

このようにロシアをめぐる周囲の環境の変化の中で、ルーマニアのヤーシで勤務する関餘作は、どのような状況下にあったのだろう。

彼の書簡を通して、推測してみることにした。

な書簡は整理の都合から、前号に続けて〔ロシア通信〕として連番号を附していくことにする。またルーマニアからの通信は、前号でも掲載しているので、今号のはルーマニアからのロシア通信㈡とし、㈠を新しく附すことにする。

二、ルーマニアからのロシア通信㈡

〔ロシア通信　18〕（大正六年二月四日）

拝啓、新春以来未タ御消息ニ不接候処益々御清福奉賀候。（中略）此地モ二週間以前ヨリ亟寒凛烈、休戦モ同様、負傷者減少、唯凍傷ノ患者ノミ頻々、中ニハ両肢ノ末梢全部ヲ犯サレ居ル物スラアリ（後略）

独乙ノ近況判然ノ事ト存候

戦争ハ未タ茫々、「ロシア」人ニハ我々同胞カ有スル如キ鬱勃タル赤心報国ノ志ナシ勇往迅進以テ敵ヲ全滅スルノ意気ナキハ蓋シ怪シムニ足ラス。「ロシア」兵ノ服装コソ夏物冬物千差万別、捕虜ノ独兵ハ鼠色ノ服ニテ騎兵ナトハ臀部ヤ膝ニハ皮サヘ当テアリ皆一定ノ服装。昨日ハ僕カ作業中に「ロシア」ノ一中将来院巻換中ノ一兵に其病傷ナドヲ尋ネテ自分ノ巻煙草ヲ与フルナド中々ニ愛嬌家ナリキ、日露戦争ニモ参加シ旅順ニモ一寸居タトカ（中略）

「ルーマニア」ハ其国民ハ大多数ハ拝金宗利己主義ノ猶太人ナリ、尊皇愛国等ノ観念ハ更ニナキ様ダ、昨夕モ猶太人種ノ一ロシア軍医ハ日本皇帝ノ月給ハ幾何カナド言フ質問アリキ、僕ハ月給ナドナシ確シカ毎年議会ノ予算ニテ三百万円支給スト答ヘタ、其男又日ク碌ニ仕事も為セヌニ其様ナ高給ハ何故カナド質問アリシガ僕ハ遂ニ答ヘサリキ猶太人ノ観念ハ此ノ如キ

昨日ハマタ一度に十人余ノ新看護婦来レリ「ロシア」ハ女天下ノ国トテ食堂ニ来テモ女連中ハ少シノ容赦モナク賄ニ向テ早ク食事ヲ持来レト請求シ少シモ遠慮ナトナキ様ダ。僕等ハ大抵其順番ノ来ルヲ待ツガ「ロシア」ノ女ハ其様ナ事ハナシ（後略）

於ヤスイ　関餘作

この手紙は二月革命が起こる寸前の時期のものだが、ロシア国内の状況は関餘作の耳には入っていないのかも知れ

ない。

ロシアの皇后アレクサンドラの政治介入を立憲民主党の指導者ミリューコフが国会ではげしく攻撃するなど、国会と政府の対立が深刻化していた時期で、関がこの手紙を送った翌月、即ち一九一七年三月に首都ペトログラードで食糧危機から大ストライキが起こった。

このストライキは大衆運動に発展し、守備兵士も反政府デモに参加する結果となる。

ここで遂にニコライ二世は三月十五日退位し、ロマノフ朝は崩壊してしまう。

手紙を通してわかることは、相当な寒さで休戦も同様だと書いている。物資の不足もロシア兵の服装とドイツ兵との比較から分るようである。ロシア女性の一端が記されて意外な気もする。現在の視点でみるのと相当な違いはあるだろう。

〔ロシア通信　19〕（大正六年三月十日）

拝啓二月三日ノ御手紙正ニ難有拝見仕候。―(中略)昨今ハ雪溶ケ際中(ママ)トテ戦闘ハナク大ニ閑、目下ハ隔日ニ此町ノ駅へ一昼夜ノ出張勤務アリ通リカカリノ「ロシア」軍人ノ病傷ヲ処置スル事トテ極メテ隠居的仕事ニ候、一看護婦ト一兵士トカ助手タリ。(中略)欧州戦争ハ日本流ニ一気呵成ニ勝敗ヲ決スルニアラデ極メテ緩慢、先ツ兵糧攻メノ戦争ノミ、恐ラク此後トテモ大活戦ハナキナラント存候。両軍共ニ壕内に蟄居シ相対抗スル事トテ前進ハ中々困難ナランカ、目下ハ戦闘ハナキモ各種ノ伝染病ハ沢山ニアリ、昨夜モ一度ニ五百余ノ腸「チフノ」来着ス。

コレラ、回帰熱、発疹チフス、赤痢等モ多々。「ロシア」ハ種痘法ナキ国トテ先日ハ前線ヨリ其中将ノ痘□ニ罹リテ来ルアリ。回帰熱ニハ日本製ノ「サルバルサン」ヲ用ヒ居リ候。然シ将校ニノミ、兵卒ニ対シテハ其侭ニ放任ス、大抵自然ニ治スル様ニ候、実ニ兵卒コソハ憐レナレ。（中略）「ロシア」ノ本国モ目下ハ食料払底、就中「モスコー」辺ニテハ「パン」大払底ノ由、然シ戦線ヘハ各物資ハ豊富ニ支給ス、僕等ニハ牛肉、バター、砂糖等ハ現物ニテ官給シ之ヲ食堂委員カ一括シテ受取リ調理シテ食卓ニ供ス。

一ケ月ノ食料三十円ヲ払フノミニテ先ツ毎日満腹致候。此処ハ「ロシア」ヨリ更ニ外国トテ毎月百五十円許リノ増俸アリ。然シ物価高キ事ハ意外ニテ「シャツ」一枚ノ洗濯賃五十銭ニ候。市中ノ商店ハ新ニ仕入ハ出来ヌ事トテ何等ノ物モナク先日来「ロシア」ノ陸軍ノ酒保開店シ日用ノ雑貨ハ弁シ得ラレ候ヘトモ目ノ飛上ル程ノ高価ニ候。「ロシア」ノ新聞ニハ独乙ニテハ牛肉ハ既ニ尽キ犬猫サヘモ食スルトカニ候事実ニヤ、（中略）戦争ハ誰レ言フトナク今年末ニハ終ルナラント言ヘリ、恐ラク何レノ方面ニテモ皆既に倦メリ居リトテ敵ヲ直ニ全滅スル程ノ力モナキ事トテ唯曠日持久、敵ノ兵糧ノ尽クルヲ待ツニ過キス、此調子ニテハ未タ二三年モ続クナランカ（後略）

於ローマニヤ・ヤスイ

関餘作がこの手紙をルーマニアのヤーシから出した頃、ロシア国内（特にペトログラード）は大ストライキが起こり、それが大衆運動に発展し、ニコライ二世の退位寸前の時である。

手紙にも書いているが、ロシア本国も食糧不足だと伝聞したのだろうか。

前線の様子やヤーシ市内の様子が伝わってくる。それにしても日本の「サルバルサン」が多く使用されているのに驚かされる。

ロシア国内の騒ぎについては書いていないが、餘作の耳にはまだ達していないのだろうか。戦争は兵糧攻めが重要であるらしい。

新兵器も使用されだしたのだが、まだこの時はそれ程使用されていなかったようである。

しかし、やがてロシアの二月革命の事なども、ヤーシの野戦病院にも伝わって来たようである。でも戦争はまだ終っていないが、両軍とも戦争をやる気がなくなっているようである。次の手紙を読むと、何となくその気配が感じられるのである。

〔ロシア通信　20〕（大正六年五月十四日）

――(前略)戦争ハ更ニ活動ナク甚閑散、或軍人ノ曰ク昨今ハ敵モ味方モ鉄砲ヲ天ニ向テ打チツツアリトカ、「ロシア」ノ昨今ノ新聞ニハ頻リニ各国ノ社会党連カ「ペトロ」ニ来リ運動シツツアリトカ、多分戦争モ有耶無耶ニ終ハル事ト存候。(中略)昨今ハ各方面共ニ戦争ハ更ニナク負傷者ハ殆ントナシト言フモ可ナリ。昨年末僕ガ此処ニ転シ来リシ当時ハ大ニ多忙ナリシガ昨今ハ唯毎日午前ニ一寸巻換アルニ過キス先ツ遊ヒ居ルモ同様ナリ（中略）昨夕モ或軍医ハ曰ク、日本ノ陸軍カ目下浦塩ニ来リ近々此方面ニ来トルカノ噂アリトカ多分唯風説ナラン。革命ノ余波ハ此処ニモ来リ、兵卒ハ頻リニ集会シテ何ニカ小田原評定頻々タリ。戦争モ出来ズ平和モ出来ス此様

ナ惰気満々ニテハ此国ノ将来ハ如何。

「ロシア」ノ天子ハ北条時代ノ天皇ノ如ク目下ハ一室ニ監禁中トカ、安川君ノ手紙ニハ唯内閣更送トアリシガ夫レ処ノ話ニアラス癈帝ト戦争トデ紛々擾々タリ、到底日本人ニハ想像モ出来ジ……（中略）

昨日ハ此処ノ副官カ他ニ転任ニ付食堂ニテ御餐ノ時ニ御馳走アリテ葡萄酒アリキ軍医連ノミナラス看護婦連迄盛ンニ飲メリ。而カモ昼飯カ午後ノ三時トテ空腹ニ酒トテ非常ニ酩酊、「ロシア」人ハ酒ノ前ニ色々ト野菜ヲ食シ酒後ニハ又タ甘キ菓子トカ茶ナトアリ、日本ノ正反対ナリ（後略）。

於ローマニヤ　餘作

二月革命の余波はヤーシにも伝わって来たらしく、「兵卒頻リニ集会シテ何ニカ小田原評定頻々タリ」と書いている。こうした状態では、両軍とも戦意などはなくなったのだろう。「敵モ味方モ鉄砲ヲ天ニ向テ打チツツアリトカ」とも書いている。

戦闘も日がたつにつれてなくなっていることも、次の手紙でも分る。

〔ロシア通信　21〕（大正六年六月四日）

拝啓四月二十二日ノ御手紙一昨日夕正ニ拝見、益々御清栄奉賀候。此地ハ東京ノ如キ気候トテ毎日炎熱に苦シミ居候。

戦闘ハ更ニナク毎日閑更閑（中略）、「ロシヤ」ノ革命ハ「ロシア」暦ノ三月一日（日本ノ三月十四日）帝ヲ廃シ今ハ仮政府ニ候。如何ニ「ロシヤ」ナリトモ其当時固ヨリ全国ニ知レ渡リ申候。

夫レ以来急ニ自由トカマタ□□カ頻リニ新聞ニ見エ申候。兵卒ハ威張リテ始末ニ困リ居リ候。

於ローマニヤ

ロシア通信20の内容と較べてみると、この手紙の方が、革命の余波が具体的な意味を持つことが分かる。「帝ヲ廃シ今ハ仮政府ニ候」と書いているが、これは既に述べたようにニコライ二世が退位し、皇弟ミハイルに譲位したものの、民衆は帝政の存続を許さず、ミハイルも即位を拒否し、ロマノフ朝の支配は終わりを告げることになり、ロシアには、ブルジョアジーの臨時政府と労働者・兵士代表の協議会との二重政権が生まれたことを言っているのであろう。関餘作には詳しい情報は届いていないだろうが、大体のことは知ることが出来たのだろう。新聞によってかなり詳しいことを知る得たに違いない。「兵卒ハ威張リテ始末ニ困リ居リ候」とあるように、今までは帝政ロシアの軍隊であったのが、急に自由になったわけで、関も困惑したに違いない。

また、兵士たちの様子を餘作はハガキにも書いて友人に送っている。次の文面はハガキであるが、以下紹介しておこう。

〔ロシア通信　22〕（大正六年五月十九日）

近来貴下ヨリノ御手紙更ニ来着セス、途中没収カ、「ロシヤ」ノ昨今乱又乱支那以上ダ、兵力ヲ以テ廃帝セシカバ兵卒ハ急ニ威張り腐リ、白昼公然銀行ヤ大商店ニ入リ掠奪スルナド実ニ言語同断ナリ。

戦争ハ更ニナク実ニ閑。二三ケ月ニシテ独乙ト講和スルトカ（中略）、憐レナルハ前帝ナリ。昨今ノ雑誌ヤ新聞ニハ頻ニ悪口サンザンナリ。ロマノフ家三百年ノ末路モ一人ノ勝海舟ナキゾ憐ハレナラズヤ（後略）

五月十九日　　関餘作

関餘作は五月から六月にかけて、しきりにハガキを友人に出したようである。それも兵士たちの行動に腹を立てている内容が多い。

例えば「革命後ハ兵隊ハ驕リ、イヤハヤ万事兵隊様ノ天下ニ候」（五月二十六日）とか「革命後ハ兵卒カ服従心ヲ欠キ頗ル軍紀ハ直シ様ナクトカ、凡テ日本流ニ考ヘテ「ロシヤ」ノ事ハ解シ得ラレズ、幾分カ支那的カト存候……」（六月十六日）とある。兵士たちの行動が目に浮かぶようである。また支那的などと言っているが、現在の中国とは全く違うもので、当時の状態から、彼はそのように表現したのであろう。

しかし戦争は続けられていた。臨時政府は戦争継続の覚書を発し、諸国との協力を約束していたからである。

〔ロシア通信　23〕（大正六年八月一日）

拝啓、六月十五日ノ御手紙正ニ拝見仕候。（中略）一週間以前ニ此方面ニモ戦闘アリ其病傷者輸送ニテ目下多忙ニ候。（中略）戦争ノ大局ハ少シモ変動ナキ様ニ候。今日ノ新聞ニモ地中海ニテ日本ノ駆逐艦カ敵ノ潜水艦ヲ撃沈セントノ事ニ候。世界一トカ称スル英国モ後進ノ日本ヲ煩ハス始末トナリ妙ナ事共ニ候。陸軍トテモ二三軍モ率ヒテ遠征シナバ伯林ヘトハ即刻ノ事ト思ハレ候ヘ共山海万里ヲ隔テ到底不可能ノ事ト存候。此処ニ来リ早第九ケ月目ニ候。

今ニ白「パン」ハ口ニセシ事ナク候。毎日黒パンノミニ候。尤モ黒パントテモ二分位ハ小麦粉混入シアリ、朝ハ之レニ「バタ」ヲ付ケ紅茶ヲ「コップ」二杯ノミ。大食漢ノ小生ハ十時頃ニハ早飢餓ノ感頻々而カモ午食ハ一時ニアラサレバ出来ズ。午食ハ「ソープ」ト肉料理一皿此外ニ「パン」ト茶ハ例ノ如シ。夕食ハ七時頃ニ肉若クハ野菜ノ料理一皿「パン」ト茶ハ固ヨリ例ノ如シ。以前ノ「スモレンスク」ニテハ三度共ニ肉食ノ御馳走アリテ満腹セシカ今ハ其様ナ訳ニモ行カズ毎日自分乍ラ痩セル様ニ候。

「ロシヤ」人ハ何事ニテモ準備ハ大ゲサニテ此処ニテモ目下大戦闘アラバトテ軍医ハ四十人モ来リ、過半ハ油屋ナリ。看護婦ハゴテゴテト百人以上モ居ル。食堂ヘ少シ遅レテ行ケバ満員客止メニテ次ノ番迄待タサル可カラス。

「ロシヤ」ハ女尊男卑トテ甚タ癪ニサワル事アリ。（中略）

此処ニモ日常品ハ大払底ニ候。「ロシヤ」ノ陸軍階行社支店アリ、状袋モ状紙モ此ノ如キ物ノミニ候。（後略）

於ローマニヤ　餘作拝

食料なども大分不足している様子が、手紙の行間を通して想像される。しかし反面ここの住民たちは娯楽を楽しむことは忘れないらしく、手紙では消略してあるが、結構観劇を楽しんでいる。関は劇場行きを同僚に誘われて歌劇を初めて観たと書いている。

またルーマニアの芝居は、札幌のよりも上等だとも書いている。戦争中なのに劇場は毎日満員だとおどろいている。関の目から見れば、日本の陸軍ならベルリンなどすぐに陥落させることが出来るのに、と考えるのも当時としては、理解出来る心境とも思われる。

すでにこの頃はアメリカが参戦している。アメリカは、大戦勃発当初は、中立的な立場をとり経済的優位を獲得していた。しかし一九一五年五月、イギリスの客船ルシタニア号がドイツ潜水艦に撃沈され、乗っていた百数十名のアメリカ人が溺死し、アメリカの対独感情の悪化に油をそそぐ結果となった。

一九一七年、ドイツが無制限潜水艦作戦を宣言するや、二月三日アメリカはドイツと国交を断ち、四月六日アメリカはドイツに宣戦を布告した。アメリカの参戦は、兵力の派遣よりも連合国に対する経済的援助が大きな力となったのである。

アメリカが参戦したとはいえ、すぐにヤーシにまでその援助効果が出るとは考えられない。ロシア本国からの輸送を考えても、困難な点はいろいろあっただろう。

何よりも二月革命の余波が、兵士たちに大きく影響していて、戦意も落ちてしまった状態なのである。次の手紙を読むと、その様子が目に見えるようである。

〔ロシア通信　24〕（大正六年九月十六日）

（前略）「ロシヤ」陸軍益々不振。既ニ新聞ニテ御承知ノ通リニ候。敵ハ既ニ「リカ」ヲ占領シ僕カ昨年在リシ「ドウインスク」ハ甚危険状態ニアリ「ペトロ」ヘハ既ニ百有余里以内ノ距離ニ過キス、而カモ内訌又内訌、斯クテハ最後ノ勝利ハ期シ得ヘキ筈ニアラス或ハ第二ノ支那タラサレバ幸ヒナリ。

戦争ハ唯英以来ノ諸国ハ皆ナ疲労、倦怠ノ色アリトカ、発起人ノ「ロシヤ」ナドハ一般ニ平和希望ノ熱盛ンナリ、此レヲ「ロシヤ」が開戦目的タル「バルカン」半島ノ覇ヲ握ルナド言フコトハ最早棚ニ揚ケ愈々腰抜野郎トナルニヤ如何。

想フニ開戦以来既ニ二三年、正々タル二三ノ少勝利ハロシヤ軍ニアリシモ未タ著明ノ大勝利ハ得シ事ナシ斯クテハ如何ニ野呂馬田吾作氏ト雖アキアキスルハ当然ノ話ナラスヤ、戦争ハ決シテ負ケ可カラス此国（ローマニヤ）ノ如キハ開戦以来僅ニ一年領土ノ八九分ハ失ヒ今ハ僅カニ気息喘々ノ状タルニ過キス、此町ハ平素七、八万ノ人口ナルガ今ハ諸方ヨリノ避難者集合シ三四十万ヲ数フト言フ、此上ニ「ロシヤ」ノ陸軍及其附属諸員ニテ数十万ハアランカ。

日用品ハ往々欠品、僕等ハ僅ニ「ロシヤ」陸軍売店ヨリ買フニ過キス（中略）

此地ニハ「ロシヤ」病院ノ外ニ英仏ノ其赤十字社ハ二三ノ病院アリ皆自費ニテ経営シツツアリ独リ日本ノ人ニノミ左様ナ高給カ此九死一生ノ「ローマニヤ」カ負担シ得ベキニヤ。

此地モ数日以前ヨリ急ニ秋風骨ニ冷カニシテ冬服トナル、柿栗ハナシ、リンゴハ美味ナラス葡萄ハ大ニ美味ナリ、

始メハ一留(ルーブル)が此国ノ貨幣ニテ十円今ハ二円五十銭トナル此レ以外ニ何モ食ス可キ物ハナカリケリ。（中略）先月中旬ハ此方面モ一寸多忙ナリシカ昨今ハ午前或ハ午後ニ三四十人の軽傷者アルノミ。

敵モ「リカ」陥落後ハ敢テ「ペトロ」ニモ進マヌ様ニ候。（後略）

於ローマニヤ　関餘作拝

戦争はドイツ側が優勢にあるようである。「而カモ内訌又内訌」とあるが、内訌は内乱のことで、ロシア国内ことにペトログラードは内乱が激しかった。

ペトログラードは十月革命直前だったのである。

すでに前述したように、この年の七月に、ケレンスキーが臨時政府の首相となるや、労働者・兵士の反乱が激化し、軍隊の弾圧がはじまった。このため、レーニンは一時フィンランドに逃れた。

〔ロシア通信　25〕（大正六年十一月一日）

（前略）「ロシヤ」ノ時事日ニ非ナリ、最早毎日ノ新聞ニテ御承知ノ通リニ候。

元来開戦三年其初期ハ帝王スラ敵国ト私(ひそか)ニ手ヲ握ラントシテ遂ニ廃役サレ（中略）此方面モ八月頃ハ敵ノ進撃アリテ甚多忙ナリシガ昨今ハ甚閑散、大抵毎日御前二三時間ノ作業スルニ過キス、現ニ今日ノ如キハ午前ニハ何ノ用モナク午後二十数人ノ処置アリシニ過キス。

革命以来所謂自由ノ名ノ下ニ愚兵共ハ将校ニ対シテモ同僚ナル語ヲ用フ、以前ハ「ロシヤ」ニテハ大将や将官ニハ最高敬称ナド用ヒシガ今ハ一切平等トナル、下層階級ハ蓋シ得々タリ。(中略)

僕カ此処ノ勤務シ早ヤ間モナク一ケ年ナラントス「ロシヤ」ニ来リテ最モ長期ノ勤務タリ、僕ト共ニ在リシ軍医ヤ看護婦ニテ他ニ移リシ者甚ダ多シ、今デハ僕ハ此処ニテ故参ノ方ダ、仕事ハ馬鹿ラシヒガ長官ヤ同僚トモ慣レテ大ニ厚情ヲ尽シ呉ル事トテ僕モ当分ハ此地在留ノ積ダ。

「ロシヤ」ノ事ハ日本流ニ考ヘテハ到底不可解、若シ日本ノ如ク上御一人ヨリ下万民ニ至ル迄一生県命ニ奮戦スレバ戦争ハ此様ニ長引キ且ツ不始末ノ訳ハナシ、ロシヤ一流ノ牛歩的態度ノ結果遂ニ今日ノ始末ノミ。(中略)日本陸軍来征ノ事ハ「ロシヤ」ノ新聞ニモ屢々記載ス、僕ハ食堂ニテ此話ノ出ル毎ニ魯ト米ノナキ国ニテハ日本人ハ活動出来スト云ヒ居レリ、又タ日清ヤ日露戦争ナドハ我国多年ノ宿望トテ挙国一致其ノ難ニ当リシコト今日ノ如キナラスヤ、何等ノ深キ関係モナキシ欧州ノ天地ニ来リ一命ヲ犠牲ニ供スル事ハ恐ラク不可能ナラスヤ、蓋シ軍隊ハ唯其国自身ノミノ干城ナラスヤ、「ロシヤ」が滅亡シ浦塩ノ辺ヘ独乙軍ガ来リナバ其時コソハ日本陸軍ヲ出征ス可ヒキナル、今ノ処デハ先ヅ無用ナリ。(後略)

於ローマニヤ　関餘作拝

フィンランドへ一時逃れたレーニンは、八月ボリシェヴィキ党第六回大会が非合法にひらかれ、全党員と全ロシア人民に対して「労働者貧農による武装蜂起と社会主義革命」の闘争目標が明らかにされ、革命軍と反革命の対立が頂

点に達したころ帰国し、武装蜂起の準備がはじまった。

十一月二十六日、ペトログラードにおける武装蜂起により、臨時政府は遂に降伏した。

同じその夜、全ロシア・ソヴィエト大会でソヴィエト権力の樹立が声明されたのである。

翌日、全交戦国に平和提案がおこなわれたわけである。

このあたりの様子を、関も札幌の友人宛に書き送った。臨時政府が倒れた十月革命間もなくの手紙が次の通信である。

〔ロシア通信　26〕（大正六年十二月十日）

「ロシヤ」ハ時事日ニ非ナリ、既に新聞紙上御承知ノ如シ。虚無党ハ暴動ヲ起シ遂ニ臨時政府ヲ倒シ講和ニ向テ着々進行シツツアリ、虚無党ノ巨魁「レーニン」ト云フハ以前「ロシヤ」ヨリ放逐セラレ独乙ニ潜伏セシカ今春革命ノ時ニ許サレテ「ロシヤ」ニ帰リ、幾度カ暴動ヲ起シ遂ニ今回ハ効ヲ奏セシナリ。彼ハ愛国ノ熱誠アラズ唯「ウ井ルヘルム」ノ手先トナリ「ロシヤ」ヲ紛々擾々タラシメ其兵力ヲ萎縮セシメントニ過キス。

「ケレンスキー」ハ諸暴動以来行衛不明、無責任千万ノ話ナリ。或ハ云フ「レーニン」トハ八百長ナリトカ、総司令官「ヅホーニン」コソハ男子ナレ。虚無党ノ一水兵が単独講和ヲ為ス可キ旨請求スルヤ彼ハ一言ノ下ニ拒絶セリ。而カモ其時既に水兵ノ毒手ノ為ニ惨殺サレタリト云フ、而カモ其□ハ各国ノ返事ナリ、司令官ハ確ニ非単独講和ヲ各国が確守スル者ト信セシナリ。大将ノ没後間モナク各国ハ共に講和ニ向テ同意ノ旨報シ来レリトカ。

「ロシヤ」ノ薄志弱行ハ勿論ナルガ英ヤ佛ヤ皆腰抜ナリ、アハレ三年ノ戦争モ何ノ為メナリシヤ「ウ井ヘルム」ニ□□為セシメンニ過キヌカ、戦後ハ「ロシヤ」ハ又タ独乙勢力ノ下ニ服シ東亜ニ於テ日露ノ衝突ヲ教示スルヤ必セリ。

若シ「ロシヤ」ノミ単独講和スレバ勿論日本トモ国交断絶スルナランカト危フミシモ今ヤ早ヤ「ロシヤ」ニハ其様ナ蛮勇モナシ此侭独乙ニ屈服スルナランカ、コチラ「ロシヤ」カ開戦ノ目的ナドハ水泡ニ帰セシニ拘ハラス兵卒ノ如キハ唯戦争ノ終ハルヲ喜ブノミニシテ連戦連敗ノ屈辱的講和ヲ憤慨スル者等ハ更ニナシ、余等常勝国民ノ目ヨリ見レバ唯憐ハレム可キノミ。

僕等ノ昨今ハ閑更ニ閑、殆ント隔日ノ作業ニ過キス最早各線皆休戦トテ負傷者ナトハナシ唯病人ヤ手術後ノ者ヲ後送スルニ過キス。

此チラ僕丈ハ屢々芝居ヤ活動見物ニ時ヲ移スノミ気分ハ数ケ月ノ後ニハ解職ナランカ。昨今ノ「ロシヤ」ノ貨幣為替相場ハ大下落僕等ノ月給ハ甚憐ハレダ

平時日本百円＝ロシヤ九十五留（ルーブル）

目下　〃　＝ロシヤ千百留

此ノ如キ始末トテ戦争カ□リモ僕ハ直ニ帰ル可クモアラス尤モ此処ヨリハ「ペトロ」ニ出テ一二ケ月滞在ノ後、帰途ニ就カントスニ□□ノ計画ガ好都合ニ進行スルヤ否ヤ頗ル苦心シツツアリ。

此地モ昨今ハ沍寒甚シ毎日摂氏零下十二度位、薪ノ供給甚不足ニシテ昼ハ殆ンド「ストフ」ヲ焚カス毎夜就床前

ニ焚クノミ。

「ローマニヤ」ハ猶ホ憐ハレダ。

市中ノ商店ハ九分ハ閉店シ飲食店ニハ肉類ハ更ニナシ、僕等モ屢々罐詰ニテ甘ンセリ菓子ナトバ早ヤ数ケ月モ口ニセス（中略）僕ハ第三回目ノ正月ヲ異境ニ迎ヘントス。餅モ酒モナキ殺風景ノ新年タリ（後略）

於ローマニヤ　関餘作拝

通信文の引用が少し長かったが、十月革命当時の状況が関餘作にはどのように映ったのだろうか。その状況に対する彼の心境が理解されるものの、日本人としての誇りが文面から読みとれる。それは日清日露の大きな戦争に勝利したという日本人の誇りみたいな心理が、彼には強く働いていただろう。これはこの時点では当然な心境だったに違いない。

それにしてもロシアに対する関餘作の目はきびしい。何のために戦争をやったのかと憤慨するのは、彼にはいつわざる気持であったに違いない。レーニンやケレンスキーに対しても疑いの目を抱いていることも、文面から想像される。ルーマニアの物資不足は相当なもので、貨幣価値なども驚く程である。

兵卒なども皆戦争が終わることを待ち望んでいる。戦線も休戦同様で負傷者などはないと書いている。いずれにしても、ヤーシで生活する民衆も、軍人関係者も寒い冬を越すきびしさに苦心している状況にあることだけは間違いない。燃料不足、食糧不足で皆困っているのである。

彼は餅も酒もない年を越すことになる。実にわびしい新年を、異境の地で迎えることになる。

〔ロシア通信　27〕（大正七年三月二十日）

「ロシヤ」の時事ハ既に新聞紙上ニテ御承知ノ通リニ候。幸ニ「ローマニヤ」ハ平穏、僕ハ例ニ依リ碌々□□罷在候。（中略）二週間ノ後ニハ此地出立、「オデッサ」ニ行キ解散ノ筈ニ候。

「ロシヤ」人自身カ此戦争ノ発起人ニテアリ乍ラ此様ノ竜頭蛇尾ニ終ハルモ誰レ一人憤慨スル人モナク皆其帰郷ヲ喜フニ過キス。「ペトロ」ヲ始メ「ロシヤ」国内ノ□□ノ都会ハ独墺軍ニヨリテ其治安ヲ保ツトカ。僕ガ此処ヨリ「オデッサ」ニ行カバ独乙兵ノ制裁ノ下ニアル事トテ果シテ如何ナルベキヤ。然シ「マサカ」ニ虐待モ為スマジ。僕モ今迄ハ余リニ気楽ナル生活ノミナリキ之ヨリ大ニ難行苦行ヲ嘗メサル可カラスト覚悟セリ。

道中カ平安ナラバ勿論帰朝ス可キガ恐ラク西比刺亜線ハ定メシ渾沌タル者ナラン。先ツ猶一年位南露ノ何レカニテ勤務セント欲シツツアリ。

日本軍カ西比刺亜ニ出征ノ事ハ二三度「ロシヤ」ノ新聞電報ニテ知レリ然シ何レノ処迄出征シ居ルヤ更ニ要領ハ得ズ、「ロシヤ」ノ陸軍ハ皆戦線ヨリ直ニ除隊帰国ヲ許セシ事トテ大砲ハ無論飛行器（ママ）や小銃其他被服器械類丈は皆ナ其侭廃棄シ独墺人ヤ「ローマニヤ」人ハ之ヲ拾得セリ。

「ロシヤ」ノ昨今ハ亡国ヲ距ル僅カ一歩ノミ、唯「ドン」川附近ノ「カザック」ノミハ「カルニーロフ」将軍ノ配下トナリテ独乙ト飽迄モ戦フトカ夫レガ為ニ日本軍ノ来援ヲ待ツ事頻リナリトカ、之レモ甚遼遠ナル事共ナリ。

日本ヨリノ郵便ヤ新聞ハ昨年十月末以来今ニ不着ダ僕ヨリハ毎月一回ハ諸兄ヘ発信スルモ恐ラク之レモ不着ナラン（中略）

此地滞在ノ二人ノ武官氏ハ昨年既に引揚ク又タ「ロシヤ」ノ赤十字社ニアリシ長野ト云フ鹿児島ノ男モ既ニ帰国セシヤトノ噂ナリ、僕ハ又絶海ノ孤島ノ住人然タリ（中略）。軍医連中ハ飲ム打ツトガ本職ノ様ダ。「ロシヤ」人ハ曽テ御一報ノ如ク酒精ヲ等分ニテ水ニテ稀釈シテ飲ム事大流行タリ。賭博ハ公開場スラアル事トテ平気ナリ。此様ナ国柄ニテハ富国強兵ハ到底不可能ノ話ナリ（中略）日本ハ西比刺亜ヲ永久ニ占領スルナルヤ否ヤ知ラズ共武力ニ依ル領土拡張ハ甚不賛成ナリ、僕ハ常ニ「ロシヤ」人ニ対シ西比刺亜ハ米が出来ヌカラ駄目ダト主張セリ。此書ハ今日「ロシヤ」ニ帰ル人ニ依托シテ附郵ス時間ガ無キ事トテ乱筆失礼

於ローマニヤ　関餘作

この手紙はルーマニアでの投函ではなく、ロシア国内のどこかで投函されたようである。

関がこの手紙を書いた頃、ロシアには大きな変化が表れていたのである。

それは十月革命で権力を握ったソヴィエト政権は交戦諸国に対し、即時休戦と公正な講和に関する交渉の開始を提議したが、連合国はこの提議を拒否した。しかし、ドイツ・オーストリア側はこれを受け入れ、一九一七（大正六）年十二月、ドイツ東方軍司令部のあるブレスト・リトフスクで休戦交渉が開始され、翌年三月三日ブレスト・リトフスク条約が調印された。

この条約によって、ロシア（新政権）は旧ロシア帝国の領土であったフィンランド、ポーランド、バルト地方を失ない、またウクライナからも撤兵することをよぎなくされた。その上六〇億マルクの償金を支払うことになったという。

レーニンはこれについて「これは講和ではない、たんなる革命の息ぬきである」と言ったということである。

ともかく、ロマノフ朝後のソヴィエト政権はこれによって大戦から離脱し、息ぬきをし、その間にソヴィエト政権の維持、国力の強化、経済的再建の時間的余裕を確保しようとしたのである。ロシア側には不利な状況にあったと考えられるが、事実戦線の模様を手紙には「……大砲ハ無論飛行器や小銃其他被服器械類丈ハ皆其侭廃棄シ独墺人ヤ「ローマニヤ」人ハ之ヲ拾得セリ」と書いている。

全く信じられない気がする。これではまるでロシア側の負け戦みたいである。

手紙によれば、二週間後には、ヤーシをはなれて、オデッサに行く予定で、そこで解散することになっているという。

関餘作にとって心配なことは、オデッサがどんな状況にあるかということである。

ロシアの新政権が単独にドイツと講和したブレスト・リトフスク条約で、ウクライナからも撤兵することをよぎなくされた以上、オデッサは、ドイツの勢力範囲に変ることになる。しかもロシア国内の都会は独墺軍によって、治安が保たれている風評も耳に入ってくる関には、不安がよぎるのも当然である。

「僕が此処ヨリオデッサニ行カバ独乙兵ノ制裁ノ下ニアル事ハ果シテ如何ナルベキヤ、然シマサカニ虐待モ為スマ

ジ」（傍点筆者）と不安を抱いている。そして「大ニ難行苦行ヲ嘗メサル可カラスト覚悟セリ」とも記すのである。

ただ手紙の文面で疑問に思うのは、「日本軍が西比刺亜ニ出征ノ事ハ二三度ロシヤノ新聞電報ニテ知レリ……」と書いていることである。シベリ出兵は大正七年八月で、この手紙の時期は出兵などはおこなわれていないわけで、風評が事実のように伝えられたのか。

ロシア革命に脅威を感じたのは、日本をはじめ、アメリカ、イギリスであった。革命の威力がどんなにものすごいものであるか、その脅威を他の諸国は感じたに違いない。

ことに日本は、国内では米騒動など社会的不安の火種がくすぶっている情勢を考えると、この不安を外にそらすことを考えねばならなかったのだろう。大正七年の米騒動で、時の寺内正毅内閣が倒れたぐらいだから、政府にしては、ロシア革命は他人事ではなくなったのである。シベリア出兵についての記述は、避けることにするが、関餘作は日本軍がシベリアに出征していると思っていたのかも知れない。手紙には、西比刺亜線はきっと混乱しているだろうから、一年位南露のどこかに勤務したいと言っているが、それは不可能のようだった。

関はこの手紙を投函してもらって間もなく、ヤーシを離れたようである。ヤーシからオデッサへ行き、それからイルクーツクへ。

三、イルクーツクからのロシア通信

〔ロシア通信　28〕（大正七年九月三日）

拝啓、昨秋以来ハ「ロシヤ」ハ暗黒界モ同様、郵電ハ廃止ノ為メ今迄ノ御不音厚謝々々。（中略）

僕事ハ「ローマニヤ」ニテハ呑気ニ生活セシモ去年五月二日「ヤスイ」市出立、途次「オデッサ」ニ行キ三週間程滞在シ五月二十一日愈々「オデッサ」出立、南露ヨリ直ニ西比刺亜ヲ指シテゾ帰リケリ。然シ道中到ル処ニ内乱紛々、列車ハ遂ニ「ヴルガ」河畔ニ停止セシカバ余等ハ三度モ川蒸気ニ乗リ西比刺亜ノ最モ西ノ「ペルミ」市ニ着セシモ猶ホ極東方面ハ騒擾ノ為メ進ム能ハス、列車ハ両三再四停車又停車、漸ク七月二十九日此地ニ着ス。

「オデッサ」出立以来二ケ月有余ナリキ。

此地ハ西比刺亜第一ノ都会人口ハ十万位アリ「バイカル」湖西ニアリ、同湖ヨリ出ル「アンガラ」川ハ此町ノ傍ヲ流ル。

此川水深クシテ清洌、日本ノ領事館ハ今年二月開館セシガ近日又引揚クトカ、目下日本人ハ三十有余名、従来日本ノ医者ハ許可セサリシガ戦争中ノゴタゴタニ乗シ此町ヘハ今春ハ数人モアリシトカ今ハ僅ニ二、僕ハ即ち目下其ノ医院ニ寓ス、蓋シ該院主膿胸ノ手術後二三ケ月僕ニ勤務ヲ請ヒシニヨル。十二月頃迄ハ或ハ此地に滞在セント存居候。日本ヘハ当分帰ル訳ニハ行カジ浦塩ニテ何ントカ工夫セント存ジ居候。

「ローマニヤ」ノ如キハ国スラモ昨年末「ロシヤ」ノ内乱ニ当リ其兵ヲ進メテ隣リノ□ヲ全部占領セリ、日本ノ陸

軍ハ昨今ニ至リ漸ク浦塩ニ上陸セシトカ何ンダ愚図々々ノ甚シヒ哉。日本ノ新聞ハ昨年九月以来今ニ見ズ郵便モ日本ヨリハ昨年九月以来更ニ着セス、僕ヨリハ「ローマニヤ」ヨリ西比刺亜ヘ帰ル人ニ托シ二三度発信セシモ夫レモ着否サヘ知ラズ。

「ロシヤ」人ハ馬鹿ナ奴ダ昨今ハ此方面ニテハ又タ独乙ト戦フトカ称シ頻リニ新兵ノ練兵アリ、日本軍ハ来リテ西比刺亜ヲ守備シナバ新シキ露ノ陸軍ハ欧州ニテ再戦スルトカ、昨今ハ南露ハ勿論「ペトログラード」「モスコー」辺モ独墺軍ニ依リ占領セラルル事トテ欧露一帯ニ戦場トナル次第ニ候。此様ニシテ戦争ハ慢性又慢性タラントス。局外者トシテハ益々面白味アリト云フ可キカ、此町ニハ日本医院二ノ外ニ朝鮮総督府ノ医学校出身ノ朝鮮人ノ医者サヘアリテ新聞ヘハ日本ノ医者ト広告セリ、何レモ皆「サルバルサン」の濫売者ニテ目下此地ニテヘ一回ノ注射百五十円モ取ル事トテ朝鮮医ノ某々ハ大ニ暴富ノ徒モアリトカ。

日本ノ陸軍カ西比刺亜ニ長ク在留シナバ日本ノ商工業家ハ勿論、医者モ少シハ出馬スルナランカ、札幌ヤ旭川ノ開業モ大ニ壮快ナランガ愚民ノ多キ「ロシヤ」人相手モ実ニ痛快ニ候。然シ夫レニシテモ「ロシヤ」語カ今少シ出来ネバ僕モ思ウ様ニ活動カ出来ズ、明日ハ「チタ」方面迄汽車通ストカニ付帰東ノ人ニ托シ、満州ニテ此書ハ投函セントス、此町ニハ一万五千ノ支那人モアル事トテ米ヤ醤油ハ高価ナレドモ常ニアリ僕ノ昨今ハ日本食ニテ候。（後略）

於イルクーツク　関餘作

関餘作がこの手紙を出した頃、日本はいわゆる「シベリア出兵」に踏みきった間もなくである。当時の状況について若干ふれると、ロシアの社会主義革命の成功の直後から、帝国主義諸国は革命に干渉する態度をとりはじめた。これは先にもふれたように、革命という力の大きさに脅威を感じたことによるものであろう。そのため日・米・英・仏は一九一八（大正七）年七月にシベリアにいるチェコ軍救出を名目に、革命に対する干渉戦争を始め、日本を先頭にシベリア出兵をおこなったのである。日本側の本心は別のところにあったのであるが、名目はチェコ軍救援であった。日・米・英・仏は総兵力二万八千の連合軍を極東シベリアに送ることを協定し、直に全兵力をウラジオストクに送った。しかし、日本は協定を無視して、ザバイカル方面にも派兵するなどして、十一月には七万三千の日本軍がシベリアの要地を占領した。

しかし日本軍は酷寒とはげしいパルチザンになやまされ、一方出兵していた他の諸国は出兵反対の動きが高まり、各国は次々に撤兵したが、日本のみは居留民保護、朝鮮・満州への革命防止などという口実で撤兵せず、数万の兵を留めていた。だが国内でも撤兵要求の世論が高まるようになり、それと共に列国の不信も高まっていき、遂に一九二二（大正十一）年撤兵を宣言し、十月には撤兵を終えた。

この日本のシベリア出兵の戦費は、当時の金額で十億円という巨額であったという。

死者三五〇〇名、全員の三分の一が負傷者という結果に終り、日本帝国主義の最初の敗戦であったと言われている。

関餘作がこの手紙を出した頃は、シベリア出兵がおこなわれた時で、彼はシベリア出兵に期待を持っていたのだろうか、日本軍が浦塩にやっと上陸したことに対し、愚図々していると腹を立てている。やはり関も軍国青年の一人だっ

たのである。

それはともかくとして、ブレスト・リトフスク講和条約の調印により、ロシア側はウクライナからも撤兵しなければならず、関餘作たちも当然ヤーシから去らねばならない。

講和条約の調印は一九一八（大正七）年三月三日で、早速関餘作は立ち去る準備にとりかかる。そして五月二日にヤスイ（ヤーシ）市を出発し、オデッサニ行ったのである。

オデッサには三週間程滞在し、五月二十一日に西シベリアへ向けて出発した。

関餘作の難行苦行はここから始まる。ヤーシからオデッサへ行く時、最も心配したのはオデッサでの独乙兵らの対応のことだった。

しかし、このことは特に問題はなかったらしく、手紙には何も書いていない。

オデッサから「ペルミ」までのコースは、大変だったらしい。途中内乱があちこちに起きていて、乗った汽車が河畔で停車し、川蒸汽船に三度も乗り移るような状態だった。

ペルミまで、オデッサからどのコースを選んだかははっきりしないものの、ペルミからはシベリア鉄道でイルクーツクへ向ったのであろう。

この鉄道も、極東方面はなお内乱があったりして、途中再三再四停車をくり返したようである。

やっとイルクーツクに到着したのが、七月二十九日であった。

五月二十一日「オデッサ」出発、七月二十九日「イルクーツク」到着。実に二ケ月以上かかったのである。

関はその時のイルクーツクの町の様子を書いている。西シベリア第一の都会で、人口は十万位だと。革命の混乱の中を、やっとの思いで都会に着いた彼には、きっと安心感でほっとしたに違いない。

当時イルクーツクには日本人の医院が二つ開業していたが、そのうちの一医院に寄寓して診療を手伝った。

それにしても、こちらの方ではまたドイツと戦うのだと、新兵の練兵をやっていると報告しているが、一体どうなっているのだろうかと思う。当時の多分風評であろうが、伝聞を伝えて来ている。

一方イルクーツクの医療事情なども伝えている。朝鮮の医学校出身者が日本の医者だと新聞広告を出したり、日本の「サルバルサン」を濫売して大儲けをする。また一回の注射の高いことなど、医者としての関餘作の目には、どう映ったのだろう。「日本ノ商工業家ハ勿論、医者モ少シハ出馬スルナランカ」と文面にあるように、シベリア出兵により、日本陸軍が西シベリアに在留しているなら、日本の医者もこの方面で開業すべきだと言っている。前述したように、日本人医師のほかに朝鮮の医学校出身の医師も二、三人開業していたようである。これは後述するが、恩師である岡山の舟岡教授に宛てた手紙にも、そのことを書き記している。

九月三日付の手紙は、実際はイルクーツクから出したのではなく、満州で投函されたらしい。「明日ハ〈チタ〉方面迄汽車通ストカニ付帰東ノ人ニ托シ満州ニテ此書ハ投函セントス」と手紙に書いているからである。

推察すると、一時「チタ」方面へ行くシベリア鉄道は、通行を停止していたものと思われる。極東方面は内乱が続いていたのであろうか。それともシベリア出兵による日本軍とパルチザンの戦いの影響によるものか。それが明日から汽車が通ずることになって、満州方面に帰る人に頼んだものと思われる。この手紙には追伸の形で、最後に「十二

月以後ハ浦塩宛ニ願上」とある。

多分関餘作は十二月にはウラジオストクに行く予定をしていたと思われる。

しかし、十二月にウラジオ行のことは実現しなかった。翌年の手紙もイクルーツクから出されているからである。

〔ロシア通信　29〕（大正八年二月十日）

拝啓益々御清福奉賀候。僕猶ホ此地滞在中、然シ今月中にハ此地出立、浦塩ニテ数日滞在、東京ニ行キ持病ノ虫歯ヲ治シ兵站部デ整ヘ再ビ西比刺亜ニ馳セント存居候。若シ時ト金トノ都合サヘ好ケレバ札幌ヘモ一遊シ度ク存居候ヘ共是レハ甚疑ハシキ候。此地寒威猛烈摂氏零下三十乃至四十度ナリ。北海道ヤ欧露ノ上ナリ。日本軍モ日本人部落モ此地カ終点ナリ。是レ以西ニハ日本人ハナシ。三井鉱山払下ノ為ニ数人ノ技師出張中。

近来非医者取締厳トナリ僕ハ従軍ノ経歴ニ依リ許可ヲ得タ、猶ホ一人ノ赤門出身、久木田ト云フ人モ許可ヲ得タ。内務省開業試験連中ハ今ダニ許可モナシ（中略）

此地ノ物価騰貴ハ非常ナリ、飲食物ハ数倍、□服類ハ十倍位、鮭（塩引）一尾カ四十円、バータ一斤七円、羅沙一尺百二十円、然シ医者ノ処ニテハトリペル一回洗浄七八円、サルバルサンハ百五十乃至弐百円ナリ。ロシヤノ近況ハ御承知通リ内乱猶ホ紛々タリ。

「ペトロ」ヤ「モスコー」ヘハ交通ハ今ダニ出来ズ夫レデモ芝居・活動・音楽会・舞踏会ハ大入ノ態ニ候。此様ナ国ノ前途コソ知ル可キノミニ候。（後略）

於イルクーツク　関餘作

この手紙でも、イルクーツク市内の様子や近郊の様子をうかがい知ることが出来る。

彼はウラジオストクを経て東京へ行き、虫歯の治療をし、物資を準備して再びシベリアに戻る意欲を伝えているが、果して東京に帰ったのだろうか。そのあたりの状況については、次の通信で概ね予想されるので後述することにする。

また日本軍もその他の日本人部落も、このイルクーツクが居留の終点だと書いているが、日本軍というのはシベリア出兵の派兵であろう。この手紙を札幌の友人に出したあとすぐに、岡山の恩師舟岡英之助教授に宛てた手紙（大正八・二・二七付）も同じような内容を記しているが、前掲の通信文に書かれていないことは、「小生事ハ昨年日本ノ新聞ニハ独軍ヘ捕虜トナリシトカノ記載アリシモ、ソレハ誤ニシテ……」ということである。日本の新聞に誤報が記事になったらしい。

また舟岡教授宛には「……由来露西亜ニハ医科大学以外に医師タル可キ道トテハ無キ処トテ、日本ノ医制制度ノ紛々タルニ驚キ居候。何卒岡山ノ少壮連中モ主トシテ海外出稼アラン様望居候」と医師の海外雄飛を促していることなど興味深いものである。

それにしても、この時はまだペトログラードやモスクワ方面への鉄道は停止したままの状態にあったのである。

もうすでに第一次世界大戦は休戦になっているのに、戦後の後遺症や内乱の影響などで、国内の機能は十分ではなかったことが推察出来る。

世界大戦の末期についてふれると、一九一八年七月半ばの西部戦線におけるドイツの敗北は決定的で、勝目がないと知ったドイツ、オーストリア両国はアメリカ大統領ウィルソンに「十四カ条」にもとずく休戦を求めた。

何よりもドイツ敗北を決定的にしたのは、ドイツ革命（一九一八年十一月勃発）であった。これはロシア革命成功の影響がロシアと交戦していたドイツに波及したのであり、大戦が続くにつれて、生活をおびやかされ、政府への不満を強めていった。そして戦局の悪化と混乱のなかで、ドイツの各地でストライキがおこり、十一月に入ってキール軍港の水兵が労働者と結んで反乱をおこすなど、ドイツ国内はゼネストと武装デモなどがおこなわれ、混乱状態におちいった。そのためドイツは一九一八年十一月十一日連合国に降伏し第一次大戦は終り、戦後処理のための会議は、翌年一月十八日からパリのヴェルサイユ宮殿で開かれた。

大戦が終わり、関餘作は今後の身の振り方を考えたのだろう。東京へ一度帰り、再度またシベリアに戻って、何かをやろうと計画したものと思える。案外医院を開業しようと考えていたかも知れないが、その点は不明である。この手紙はパリでは大戦の戦後処理の会議が開かれたころである。それにしても市内の物価は高く、市内の模様なども想像出来る。

また「ロシヤノ近況ハ御承知通リ内乱猶ホ紛々タリ」の状況にあった。それでも芝居や音楽会は大入満員の様子に、餘作はあきれてしまったようで「此様ナ国ノ前途コソ知レ可キノミニ候」と嘆きたくなる心境であった。

前掲の通信29には、今月中（二月）にはイルクーツクを出発して浦塩に向うと書いていたが、三月もまだ出発せず、四月初めに出発したのではないかと思われる。次の手紙を読むと、そのように思われる。

〔ロシア通信　30〕（大正八年三月四日）

（前略）小生事ハ旧冬以来浦塩ヤ哈爾賓ニ行キ色々ト柄ニナキ事ヲ工夫致候へ共先方ノ町人カ無能ノ徒トテ遂ニ失敗ニ終ハリ申候ニ付最早町人ノ仲間入ハ断然廃止シ、本業ヲ守リテ尽瘁致度存居候。就テハ近々ニ出立東京ニ行キ持病ノ虫歯ヲ療シ多少ノ兵站部ヲ整へ、再ビ西比刺亜ノ地ニ馳セ度ト存居候。（中略）当市へハ一昨日日本ノ副領事着任、然シ日本ノ商人ハ先ツ碌ナ物ハナシ。洗濯屋ハ八軒、医者ハ六軒アレトモ其半ハ非医者ナルゾ憐ハレナル。

此方面ハ先ツ平安ニ候。「ロシヤ」人ハ国ガ九分九厘亡ヒカケナルニモ不拘、毎夜芝居ヤ活動ハ大入ニ候。今ノ模様ニテハ天下泰平先ツ覚束ナキ次第ニ候。

各物資ハ固ヨリ不足ナレトモ辛フシテ生活シ得候。（後略）

於イルクーツク　関餘作

※小生ヘハ当分御通信御見合セ上願度、浦塩経由ニテ四月早々ニハ着京ノ予定ニ候。其節ハ御一報可申上候。

この手紙によると、関餘作は前年の冬から何度かウラジオストクやハルビンに出かけたようである。「色々ト柄ニナキ事ヲ工夫致候へ共……」と書いているところをみると、何か医業以外の仕事を計画したが、それがうまくいかなったのだろう。「最早町人ノ仲間入ハ断然廃止シ本業ヲ守リテ尽瘁致度存居候」と、本業の医業をやる決意をした。

そしてウラジオストク経由で、東京には四月早々着く予定と追伸している。

しかし、四月に間違いなく東京に行ったのかは、不明である。ただし翌年（大正九）の二月に東京で撮った写真が残っているから、大正八年四月から翌年の二月の間に、東京へ行ったことは、間違いない。それがいつなのか特定することは、今の時点では難しいが、手紙の追伸に書いたように四月説が妥当な気がする。

大正九年二月の写真というのは、親類の君塚貢宅で撮影したものである。

東京からウラジオストクに戻ったのは、大正九年のいつかははっきりしないが、ウラジオストクに戻った餘作は、医師として勤務することになる。

四、「一番川施療所」に勤務

東京から戻った関餘作は、ウラジオストクに腰を落ち着けることにする。一度は町人と何かをやる計画もしたが、それは失敗しやはり医業に専念すると心に決めたのである。

ウラジオストクでは「一番川施療所」というところで、勤務することになったのだが、どうしてか「一番川施療所」勤務中の手紙は一通も残っていない。そのため「一番川施療所」で医療に従事した時の様子なども、ほとんど分からない。ただ残されている写真で、想像してみるより他に方法がないのである。

「一番川施療所」は当時の陸軍病院の所管にあった施設のひとつのようである。残されている写真では、大正九年十

写真1　「一番川施療所」の仲間たちと（軍刀を持っているのが関餘作）大正10.7.25写

二月十五日付のものが最も古く、大正十二年九月一日関東大震災の報がラジオに達した時、撮影した個人写真が最も新しい。

写真1は大正十年七月二十五日撮影のもので、裏には「一番川施療所連中」と記しているから、仕事を共にしている人たちであろう。軍刀を持っているのが、関餘作である。

写真2は大正十一年三月十二日撮影のもので、裏に全員の氏名が記されている。朝鮮人と日本人の名が記されている。

写真2　「一番川施療所」（軍服姿で立っている3人の中、向って左端が関餘作）大正11.3.12写

くり返すようだが、残っている写真で、一番川施療所時代で最も新しいのが、大正十二年九月一日のものだが、気になるのは日本がシベリアから撤兵したのは大正十一年十月、そして尼港（ニコライエフスク）事件が起こると、北樺太（サハリン）の保障占領をおこなったが、一九二五年（大正十四）五月には北樺太からも引きあげたことを考え合せると、シベリアから撤兵したのに、ウラジオストクにまだ日本の施療所があることである。

シベリアから撤兵しても、本国に移送出来ない患者がいたためではないかと考える。

あるいは北樺太にまだ日本軍が保障占領している関係から治療する必要があって、撤兵後も病院が存在していたのかも知れない。そのあたりはまだはっきり理解出来ないでいる。やはりこの面の専門家にご教示頂きたい点である。

関餘作がウラジオストクの「一番川施療所」で医療に従事した期間は、いつまでであったのか。この施療所が閉鎖されるまで勤務したであろうが、この施療所の閉鎖期日も今のところ不明である。

その後関餘作は日本に帰り、大阪商船医に転身、世界各国を巡る。

次にそれについて知り得たことを、概略述べることにしたい。

写真 3　「一番川施療所」の施療光景（外国人の姿も見える）大正 11.3.写

五、大阪商船の船医に転身

「一番川施療所」を引きあげ、日本に戻った年ははっきりしないが、一九二八年（昭和三）には大阪商船に船医として入社した。

大阪商船の船医となって入社するについての仔細が分からないかと、大阪商船に問い合せてみたが、資料も残っていないらしく、何ひとつ手がかりはなかった。問い合せたのはもう十五年以上も前のことであったが。

戦後北海道の岩内郡共和町の国富に開業していた時、医療関係の機関紙『北診』に、五島庄吉という人に宛てた手紙が掲載されているが、その文中に関餘作は昭和三年に船医になったことを、はっきり書いている。

次にその手紙の関係部分のみを転載させて頂く。

昭和二十七年八月三十一日　　国富において　関餘作

五島庄吉様机下

（前略）生来東漂西伯の愚癖あり、第一回の欧州戦争の時も少しばかりロシヤ語の知識を有せる事とてロシヤ陸軍義勇兵の軍医となり「ルーマニヤ」の野戦病院等に勤務せしも「ロシヤ」敗軍の為身を以って免れ帰国、次いで昭和三年より大阪商船の船医となり、欧州南米等を航海すること十有五年、日本敗戦のため愈々赤貧となり、余

喘を保つに過ぎず、実に面目次第も無之候。

（後略）――。

（『北診』昭和27年9月10日号より）

右の手紙にあるように、船医となって欧州南米等十有五年航海したことは間違いない。

しかし、船医となって直ちに欧州航路の船に乗船したのか疑問も考えられる。二年位は近海を航行する船であったかも知れない。

疑問に思う理由は、次の手紙にある。

手紙は昭和五年六月に、欧州へ向う途中日本の瀬戸内のどこかで、札幌の友人に宛てたものである。

佐山大人机下

昭和五年六月二十六日夕　於瀬戸内

拝啓、益々御壮栄大賀候。

今回ハ突然来上、御多用中ノ処定山渓行ナド非常ニ御厚情ニ興リ（ママ）特ニ出立ノ際ハ態々駅頭迄御見送上下何レトモ御礼ノ申上様モナキ次第ニ候。私事札幌一別後ハ途上無事二十三日午後一時大阪着、翌二十四日ハ小休息ヲ為シ二十五日神戸ニテ乗船同日夕神戸ヨリ大阪ニ来リ荷積ヲ為シ今日朝九時大阪出帆、愈々渡欧ノ途ニ就キ申候。

今回私ノ旅行ハ六月九日大阪駅出立ニ始マリ十勝ノ陸別及北見ノ上湧別迄モ巡遊シ、殆ンド飛脚同様ニテ道中ハ未切符トテ多少ハ疲労致候へ共存外弱ハリモセス先ツ此船ノ自室ヘト帰リ申候。

来二十九日ニハ大連へ着、七月三日大連出帆、上海香港等々ヲ経テ九月始ニロンドン着ノ予定ニ候。何レ道中各地ヨリ又画葉書ニテ御伺可申上候。（後略）（傍点等者）

右の手紙の文面を読むと「……愈々渡欧ノ途ニ就キ申候」とあり、最初の欧州航路の決意のような気持である。そして長い欧州航路の船医として出発する前に、関餘作は父親関寛斎の最終の地、陸別を訪ねたり、知人たちを訪ね歩き、札幌では札幌病院時代の仲間たちに会ったりして、大阪へ帰った。

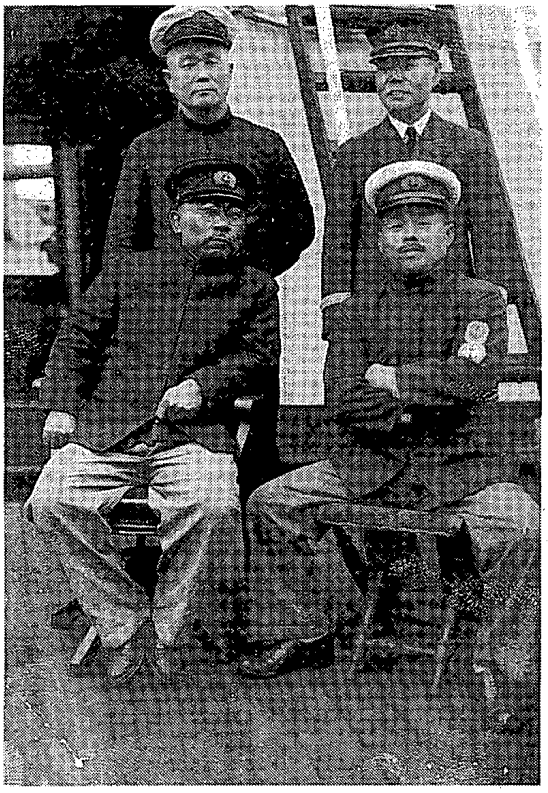

写真 4　ビスケー湾でのアルタイ丸船上で。（立っている左側が関）昭和 5.10.3 写

その前後の動向を推測すると、欧州航路はこれが最初ではないかと思ったわけである。

何れにしても、関餘作の生活は船医として世界各地を巡る生活に一変する。

彼が船医として乗船した貨客船は、「アルタイ丸」「あふりか丸」「まるら丸」「さんとす丸」「あるぜんちな丸」で、残っている船医時代のもっとも古い写真は昭和五年

十月三日、ビスケー湾でアルタイ丸の仲間四人で写したものである（写真4）。

最も新しいのは昭和十六年七月に、あるぜんちな丸で写したものである（写真5）。

余談だが「あるぜんちな丸」は当時の大阪商船を代表する貨客船で一二、七六〇トン。

昭和十四年七月に就航した。東京湾でのお披露目には、十万人の見物客が押しかけたという。しかし時代は風雪急を告げる情勢となり、貨客船としての活動は短期間で終わり、やがて海軍籍となり、昭和十八年十一月、大改造されて航空母艦「海鷹」として再登場する。

二十年三月十九日、呉軍港で被弾。七月二十四日、豊後水道で機雷触雷。えい航されて別府湾へ。七月二十八日直撃弾三発を受けて大破、擱座。貨客船時代一年十カ月、空母時代一年八カ月。実働計三年半であった。（朝日新聞・一九九〇・三・五　記事から）

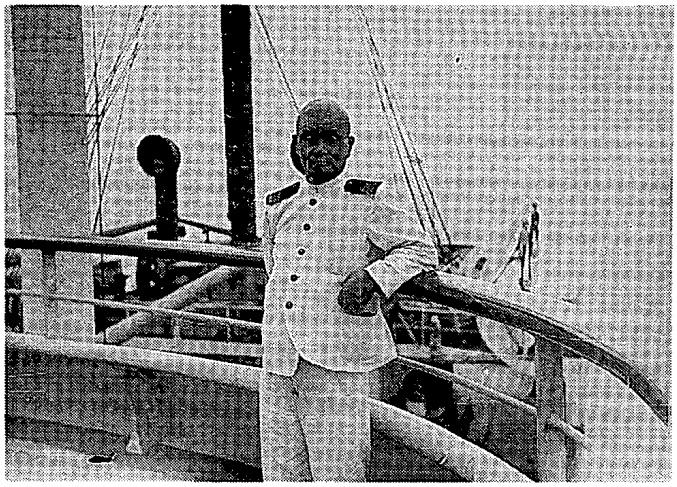

写真5　あるぜんちな丸船上で。昭和16.7.写

船医生活の間、関餘作は葉書を友人に宛てて出したが、内容は特別なものではなく、その土地の様子など簡単な内容のものが多く、また予定など簡単に書いたものである。

葉書の内容を紹介する紙幅もないので、避けることにするが、航行して寄港した場所は全世界の港のほとんどであるといってよいぐらいである。

アジア方面では大連、上海、香港、シンガポールはもちろん、米国、南米、ヨーロッパ、アフリカ等の諸港である。

彼が寄った場所のいくつかを挙げると、ニューヨーク、ロスアンゼルス、コロンボ、ロンドン、ハンブルク、ロッテルダム、ダンケルク、ベルリン、ポートサイド、エムデン、モンバサ、ダーバン、ケープタウン、サントス、リオデジャネイロ、ブエノスアイレス等実に多い。南米への航行は主に移民の輸送が多かったが、その他は物資の荷積、客の輸送が主であった。

写真6は移民輸送のため航行中の「あふりか丸」の船上で洗眼をしている光景で、日本人移民に当時トラコーマの眼病が多かったため、移民船が移住地に到着するまで、その治療をしたという。これは昭和八年十月二十三日撮影と記されている。

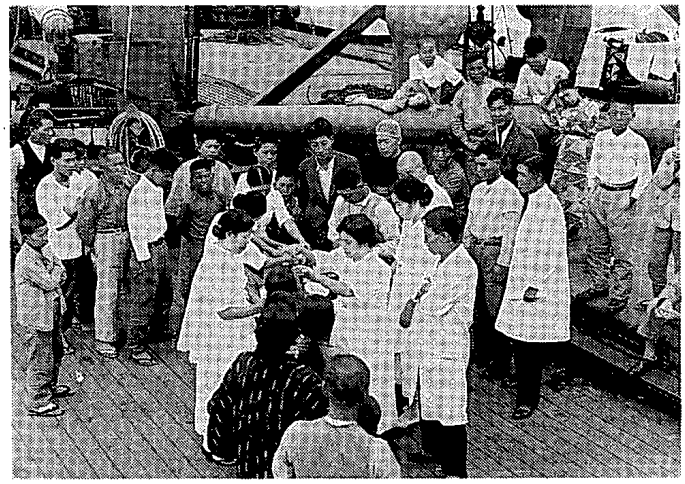

写真6　あふりか丸での洗眼光景。
昭和8.10.23写

ところで関餘作が船医をやめ、日本に戻った日を明確に特定出来ないが、彼が最後に乗っていた船は「あるぜんちな丸」である。

この船は前述したように、昭和十八年に海軍籍になったことを考えると、彼が船医の職から退いたのは、多分この時期であろう。

六、おわりに――勤務医から開業医への生涯――

船医を退いてからの直後の動向は今のところ不明であるが、間もなく北海道に帰り、岩内郡共和町国富の住友金属鉱山KK国富鉱業所の診療所に外科医として勤務する。

大阪商船の船医を退職した後の動向ははっきりしないと述べたが、多少は休息したのち、多分程なく北海道に戻ったものと思われる。彼が国富の診療所に勤務したのは、昭和十八年頃だと関係者は言っている。

最初は正式な勤務医であったが、のち診療所を退いて嘱託で勤務した。

そして間もなく昭和二十五年に国富で開業医としてスタートする。この時すでに七十五歳である。開業医としての関餘作は父親関寛斎と同じように、金の無い者には無料診療であった。開拓地を毎日のようにステッキを持ち、カバンを背負い、地下タビ姿で歩いて行った。

「自分も貧乏なのに、それでも貧しい人からお金をいただかないのですから……。」と餘作と再婚した夫人、関さつきさんが筆者に話した言葉だが、餘作の生活行動に関寛斎と生き写しの人物像をみるようである。

生涯の中で貧しい生活ではあったが、落ち着いた生活を過したのは、国富の街でおくった勤務医と開業医の期間(両方合せて十七、八年間)だけであったのではないか。

昭和三十五年十一月五日午後八時五十五分、信頼する医師丸山啓吾氏や夫人に看とられながら国富鉱業所診療所の一室で、八十六歳の波乱の生涯を閉じた。死亡原因は「尿道狭窄症」であった。

想えば関餘作の人生は、まさしく波乱の生涯と言えるだろう。血気盛んな時期、彼はロシア帝国の軍医として、おそらく日本人としてはただ一人、第一次世界大戦時の野戦病院で医療に従事し、そこで見聞した生(なま)の人間の姿、それも異国の人間像にどのような思いを持ったであろう。

そのうえ、ロシア革命という大変転に遭遇し、やっとの思いでシベリアにたどり着く。

そのあと一時期ウラジオで医療に従事し、心の落ち着く間もなく、欧州、南米、アフリカ航行の船医に転身したが、第二次大戦では船舶の沈没による不足から、自分が活躍の場である船も海軍籍となり、下船するしか選択の道はなかった。

敗戦の色濃い日本で、関餘作の最後の人生を過すため、自分の天職を全うする決意をしたに違いない。北海道の小さな街にある会社の診療所に勤務しながら、時には宏大なロシアやウクライナ、ルーマニアの大地に想いを馳せることもあったろう。

しかし彼にとっての現実は、厳しいものであった。地下足袋をはいて開拓地の往診に向う毎日の生活は、老いた医師にとっては大変だった。

「ほんとうになりふりをかまわない方でした。他人の世話にもならず、食べるものも味噌汁とご飯だけでした……」と餘作の未亡人さつきさん（当時七十五歳）が筆者に話してくれたことを、今も鮮明に憶えている。

本稿は人物論が目的ではないから、個人的なエピソードはなるべく避けたいが、知られざるエピソードは多くあることを付け加えておきたい。

さて、欧州大戦において、関餘作のようなかたちで関わった日本人がいたことは、ほとんど知られていない。ましてや歴史の舞台にも顔を出すことなく、忘れ去られてしまう。

しかし、欧州大戦の生（なま）の姿を見聞し、実体験した日本人は、何人いただろうか。

しかも彼は実際の状況を手紙に書き残したのである。こうした彼の行動の評価を云云するのではなく、このような一人の日本人が実在したことも知ってほしいと、願うわけである。今流で言えば国際貢献のはしりである。と言えるかも知れない。

おもえばこの北海道という大地は、幕末から明治初期において活躍した医人・関寛斎と子息の関餘作にとって、まことに縁の深い地であった。

※参考文献

・日本近代史研究会『図説・国民の歴史12』国文社、昭和四十年
・荒畑寒村『寒村自伝』上下巻　岩波文庫、一九七六年
・大西泰久『北海道の医療史』北海道医療新聞社、昭和五十一年
・『日本医事新報・一九一八号』日本医事新報社、昭和三十六年
・『北海道医報・第四九号』北海道医師会、昭和三十七年
・『朝日新聞・一九九〇・三・五』所載、「空白への挑戦――客船がゆく8」